

ルカーチ文学史の基本的構造 (上)

浦野春樹

ルカーチの柔軟な理論に関しては、我が国でも様々な評価がなされて来た。しかしルカーチの全体像を正しく把握し、ルカーチが文学・芸術理論において達した高み、そこに提出されている諸問題とそのルカーチの解答、それらを批判的に摂取しつつ我々の生きた力として行くという努力は、まだ結実しているとはいえない。

この小論はルカーチ理論の全般的批判を企てるものではなく、ルカーチの全体像を浮彫りするための出発点に過ぎない。そのため些か繁雑のきらいがあるが、ルカーチの言葉をそのまま引用することも多い。

「存在するのは唯一の統一的科学だけである。即ち自然・社会・思想などの発展を統一的な歴史的過程として捉え、その一般的及び特殊な——個々の時代に關係する——合法性を発見しようとする歴史の科学である。」(『マルクス・エンゲルス芸術論入門』S. 192 P. 159) ルカーチは歴史の発展を統一的に、しかもその相対的独自性において、哲学・美学・文学など、イデオロギーの発展を弁証法的に統一して捉えようとする。今はこの問題をごく限られた領域において取扱うにとどめる。

なお引用は全て邦訳し、原書の頁数をSで示し、邦訳のあるものについては邦訳の頁数をPで示すことにしたが、訳文は必ずしもそれによつていない。引用は小論に附したルカーチ著作目録によつて

(一)

戦前いち早く紹介された、ルカーチの『マルクス・エンゲルスとラッサールとのジッキングン論争』*は、ソヴェトにおいて社会主義リアリズム、批判的リアリズムの問題が定着される直前、即ちルカーチの第一次モスクワ滞在時、一九三一年に書かれた。哲学・美学・文学のマルクス主義的理論家として、ルカーチが華々しく活躍し始めるのは、第二次モスクワ滞在、一九三三年以後である。

*岩波文庫『マルクス・エンゲルスの芸術論』上田進訳編(昭和九年五月発行)の第二篇の解説が、『ジッキングン』をめぐるマルクス・エンゲルスとラッサールとの論争……ゲオルグ・ルカッチ」となつてゐる。

ソヴェトにおけるマルクス・エンゲルスの著作の蒐集、刊行、研

究は、一九三二年、『経済学・哲学手稿』『ドイツ・イデオロギー』の出版、マルクスⅡエンゲルスの、文学を問題にした書簡の、雑誌『文学遺産』における発表などとなつて結実する。マルクスⅡエンゲルスのこれら諸著作を媒介にして、マルクス主義における芸術理論は、過去の俗流唯物論、図式主義を急速に克服し始めた。

ルカーチの理論活動はこの過程において始められる。ルカーチ理論は全ヨーロッパ文学の広い教養の上に立つた柔軟な理論であるとしてよく云われる。しかし柔軟ということとは方法論が曖昧ということでも妥協的だということでもない。まさにその逆である。彼はア・ゼーゲルスに宛てた書簡の中で云う。「もし批評家として、リアリズム一般の条件と法則とを探究することにコースをとらないならば、今日のリアリズムに対して折衷的な態度しかとれないでしょう。そうすれば、貴女がここで非常に正しく強調なさること、即ち今日可能な最高のリアリティーを誰も要求しはしないでしょう。正しい批評は芸術的歴史的分析を通して、何が今日リアリズムに関して客観的に可能であるかを、繰り返し示さねばなりません。そして批評に一つの基準（リアリズム一般）がある時だけ、批評はこれができるのです。そうでないならば、今日一般にリアリズムとして通用しているものに（たとえその基本傾向が反リアリズムイックであるとしても）満足してしまふでしょう。」（『アンナ・ゼーゲルスⅡシュルジ・ルカーチ往復書簡』S.256 P.889）

一つの文学作品をリアリズム文学であると評価するには、リアリズムとは何かという理論体系を持たねばならないということとを、ルカーチは要求している。そしてこの基準になつてゐるのは内容に関

しては、「人間の個性の、一切を包括する統一的な発展」（『ヴェルテル論』S.22 P.33）であり、「この原理を実現しようとするたたかいであり、その実現に反対して外的内的に妨害することに対するたたかい」（『同上』S.22 P.34）である。そして形式に關しては、「対象の特質、その本質的規定の關係の特質が、芸術的表現の特定な形式を規定する。芸術表現のそのような典型的形式がジャンルである」（『シラーⅡゲーテ往復書簡』S.63）とルカーチはいうように、上記の内容にふさわしい形式が獲得されなければならない。このことは『バルザックとフランス・リアリズム』の『序文』の中で、「全的人間（*l'homme universel*）の適切な芸術的表現が、リアリズムの中心的な美学問題である」（S.9 P.7）と定式化される。このことこそ、前に述べたルカーチ理論の柔軟さの本質である。

今ルカーチの三つの別個の論文より引用が行われたということとは、決して偶然ではない。このことについては後述する。

ところで文学を階級心理学、歴史学、社会学などに解消してしまつた俗流唯物論や図式主義から文学を救い出し、文学の相対的独立性を確立させ、文学独自の法則を探究しようとする当時のソヴエトの動向の中で、ルカーチは焦眉の問題を絶えず追究する。ルカーチはフランク・シルレルとの共同活動から推測できるように、文学理論の指導者である。しかもシルレルよりも文学の本質へ遙かに迫つてゐる。ルカーチが絶えず問題にしているものは、「リアリズムは……デテールの真実さのほかに、典型的状態における典型的性格の忠実な再現を意味する」*という、あのリアリズムの諸問題である。

* マーガレット・ハークネス宛のエンゲルスの書簡 ロンドン一八八八年四月始め頃

資本主義社会が人間関係の本質を直接に現象としては示さないと
いうことから、文学の危険な傾向、即ち自然主義と観念化・様式化
とが生じる。自然主義は一般的本質的なものと私的個別的現象的な
ものとの弁証法的統一を失つたまま、個別的な現象を写真的に敘述
する。またこの本質と現象との弁証法的統一の困難から、現実を
拒否する態度に媒介されて、文学による現実の観念化・様式化が生
じる。この二つの危険を孕みつつも、いかにして偉大な文学が典型を
創造することにより真のリアリズムに高まり得たかということをし、
三十年代のルカーチの作品論、作家論、文学理論などは追究する。
これらアクチュアルな問題を追究する諸論文は、アクチュアルで
あればあるほど、様々な段階を反映している。三十四、五、六年の
諸論文*は詳細な作品・作家分析を行つてゐる。

* ルカーチ著作目録参照

まず『農民論』を取り上げてみる。バルザックが貴族文化の没落
の挽歌を歌いながら、貴族、農民、金利資本の三陣営を設定するこ
とで農民の悲劇、資本主義の勝利の非人間性を描き上げた『農民』
を、詳細にルカーチは分析した後で云う。「バルザックは経済の客観
的發展のこの弁証法を見ていない。彼は貴族制の大土地所有の正統
派的讃美者としてはこの弁証法を見ることはできない。しかしフラ
ンス社会史の仮借ない観察者としては、分割地のこの経済的弁証法
がもたらす社会的な動きと發展傾向を非常によく見ている。彼の偉
大さは——彼の政治的及び世界観の偏見とは無関係に——明らかに

なる一切の矛盾を清廉潔白な眼で観察し形象化するという点にこ
そある。」(S. 37-8, p. 63) 文学に対するエンゲルスの天才的な深
い洞察の一つ、「リアリズムの勝利」について、ルカーチは敷衍説
明している。

ルカーチの方法論には常に深い弁証法がたらぬいている。しかし
ここにいわれ且つ詳細に分析されているのは、内容と形式との芸術
の弁証法ではなくして、内容に反映されている社会史の弁証法であ
る。作家の主観が王統派に属しながらも、ブルジョアジーの勝利と
農民の悲劇を描き得た矛盾についても、『農民論』では述べられて
いない。これら芸術的实践における矛盾の弁証法的統一の問題が意
識的にルカーチの問題となるのは、更に先のことである。一九三八
年の晩秋、『若きヘーゲル』が完成し、そこにおいてヘーゲル弁証
法の生成が究明される。この追究を通して始めて、内容と形式の、
芸術上の弁証法が詳細に論述される。この高みに立つて、『十九世
紀ドイツ・リアリスト達』に取められた幾つかの論文、中でも『ゴ
ットフリート・ケラー』とその翌年の『ファウスト研究』との二大
論文が書かれる。この内容と形式との弁証法については、別の章に
おいて述べられよう。

十八世紀啓蒙主義のイギリス小説、ドイツ文学、啓蒙主義の矛盾を
克服して十九世紀前半のリアリズム小説へ橋渡しするドイツ古典主
義文学、そして十九世紀リアリズム、そして更に一八四八年の革命敗
北後は自然主義と唯美主義へと解体する西欧文学、それと対比的に
文学の核心を保持するロシア及び北欧の文学。そして現代の問題に
なつて社会主義リアリズム。ここに列挙された文学の系列こそ、ル

カーチ文学史である。そしてこの文学史の基本は、弁証法的唯物論と史的唯物論とによる内容と形式の、芸術上の弁証法である。そしてこの具体的な展開の中に、様々なルカーチの欠陥を、一例をあげればドイツ古典主義に対するルカーチの高い評価を人は指摘するのである。——しかしその批判の当否は極めて疑問である。この小論では、こういうルカーチの評価の生じる根源をさぐりながら、ルカーチ像を浮び上らせてみたい。

問題を再び『農民論』に戻そう。

「非常に慎重な用意にも拘らず、また基礎概念の徹底的な考慮にも拘らず、バルザックは意図したものは正反對なものを事実上は形象化してしまった」（『同前』S.19 P.22）という「思想家・政治家としてのバルザックと、『人間喜劇』の詩人としてのバルザックとの間のこの矛盾」も、エンゲルスの言葉を受けてルカーチもいうように、バルザックの偉大さには違いないが、そういつただけではすまされない問題である。しかしこの問題も、ずつと後になつてルカーチの具体化する問題である。

前述のようにこの点については、『農民論』は、明らかに一切の矛盾を清廉潔白な眼で観察し形象化する」から偉大さに達する、という論理を持つにすぎない。——この論理のでてくる洞察力及びこの論理そのものは正当に高い評価を与えられるべきであることはいうまでもない。——ところが戦争直後の『マルクス＝エンゲルス芸術論入門』においては、この「リアリズムの勝利」は「真に偉大な作家・芸術家の持つ、どの空虚さからも自由な、清廉潔白な芸術的誠実や」（S.22 P.576）によるのであり、この「偉大な芸術家の

誠実さは次のことにこそ、その本質がある。即ち偉大な芸術家は、自分の見解や幻想のために自分の空想の中で形象が作られたその見解や幻想と、形象の展開とがく違つてくると、彼はその形象を自由最後の最後まで展開させ、自分の最も深い確信が現実の真の深い弁証法と矛盾するために自分の確信がふつとぶくことをも意に介しない。（S.213 P.576）

このことは『バルザックとフランス・リアリズム』の『序文』では、「小つげな作家は、自分の世界観と現実とを一致させることに、即ち、世界観を、適当に歪めぬじ曲げた現実像におしつけることに成功する。……偉大なリアリストの形象は、一度詩人の幻想の中に発生したならば、その創造者から独立した生活をする。即ち、一つの方向に発展し、社会的存在と精神的存在との内的弁証法が規定する運命を負う。自分の形象の発展を自由にできる者は、真のリアリスト、すぐれた作家ではあるはずがない。」（S.14 P.146）「作家の世界観と、見られた世界の忠実な反映との間の矛盾として、前に我々に示された矛盾は、今や世界観の問題として、即ち、作家の世界観のより深い層と表面の層との矛盾として明らかにする。」（S.15 P.16）このように説明されている。

この「作家の世界観のより深い層と表面の層という定式は、ルカーチの一九四五年のスローガン「ゾラではなくバルザックを」によつて一体何をなしたかという、レヴァイの批判にこたえて編み出された定式であるが、依然として作家の創造活動に縁遠いといわざるをえない。このことについては、また後に述べることにする。

問題をここでもう一度『農民論』に戻すことにする。これも前に

引用したエンゲルスの定着と関係していることであるが、リアリズムと自然主義との対立の問題である。この問題は『農民論』と同年に書かれた『シラー—ゲーテ往復書簡』や翌一九三五年に書かれた『シラーの近代文学理論』その他の論文においても執拗に追究される。しかしまず『農民論』を分析しよう。

「バルザックのこの深いリアリズムは、彼の創作方法をデテールに到るまで規定する。……バルザックはこせこせした写真的な自然主義の限界をいつも越えて行く。彼は本質的問題において、常に深く、真実である。即ち、彼は作中人物に、その社会的存在から必然的に生じはしないことや、抽象的規定においても特殊的規定においてもこの社会的存在と完全に一致しはしないことを、云つたり、考えた、感じたり、行わせたりは決してしない。しかし彼はこの内容的に正しい思考や感情を表現するにあたり、特定階級の人間の平均的な表現能力の限界によつて制限されはしない。社会的に正しく、且つ深く捉えられた内容に対して、最大限に明白な、最大限に尖鋭な（自然主義には不可能な）表現を、彼は絶えず探求し、そして見出すのである。」（S.41 P.58-9）

現象を本質とは無関係に写真的忠実さで描写し敘述する自然主義に対して、「日常的なものの限界を常に越えてゆくが、社会的に内容的には（即ち本質的には——筆者註）常に真実であるこの表現は、古い偉大なリアリズム、デイドロ或はバルザックのリアリズムの特殊性である。」（S.42 P.61）社会的な人間関係の本質を、バルザックが『農民』において見事に具体的に形象化したことを、ルカーチはエンゲルスの書簡の分析を更に詳述することによつて浮彫

りにする。

この問題、リアリズムと自然主義との問題は、一九四〇年の『ゾラ生誕百年祭』において具体的に論述されるが、この論文については後述することにする。ただこの論文について触れておかねばならないことは、ルカーチがこの論文の最後で、「進歩のための断乎としたゾラのたたかいは、彼の多くの作品よりも生き続けるであろう」（S.99—100 P.156）と述べていることである。このことはゾラの文学を過小評価することではなくして、ゾラの文学は進歩的で当時最もすぐれた文学であつたにも拘らず、「悪い」時代に制約されて真のリアリズムにまで高まらなかつたということを一方では述べており、他方では第二次世界大戦を準備するナチズムのイデオロギーをゾラの進歩性と対比させているのである。

ルカーチのリアリズム文学理論の基本的性格を規定しようとして、前に異つた三論文から引用した理由は、おのずから明らかにした。ルカーチ理論は形式的アカデミズムを遙かに凌駕し、絶えず革新的に文学理論を展開している。ルカーチが精力的に活動を開始した時は、芸術の様々な問題がまだ未発展の状態にあり、それら諸問題を統一的に把握できなかった段階に立っている。諸論文の執筆という実践を通して、分散されていた問題は統一になり、且つまた問題は深化された。その過程がヘーゲル弁証法の研究であり、戦前の理論的水準を示す作品分析、作家分析が、『ゴットフリート・ケラー』であり、『ファウスト研究』であることはすでに述べた通りである。この二大力作を含めて戦前書かれた多数の分析に基いて、戦後集約定式化されたのが、文学理論としては『マルクス—エ

ンゲルス芸術論入門』であり、その文学史への展開が『帝国主義時代のドイツ文学』『ドイツ文学における進歩と反動』及び『バルザックとフランス・リアリズム』への『序文』である。また芸術理論の歴史的展望が『ヘーゲル美学』である。(その他、哲学の分野における『実存主義かマルクス主義か?』などがあるが、ここでは触れないことにする。)

現在ルカーチは美学論の執筆に従事していると聞く。(その第一巻はすでに完成されているかも知れない。)そこでは恐らく芸術・文学論が具体的に展開されていよう。しかし今は、右にあげた総括的な諸論文の段階において、ルカーチ像を把握するよりほかない。

(二)

ルカーチはその『ヴェルテル論』を次のような言葉で結ぶ。

『ヴェルテル』の燦然たる美しさが、人類発展の二度と歸らぬ時期、フランス大革命の日の出が続くあの朝やけをあらわすことを、ゲーテは感じるのである。(S.30 P.49)

このことは『若きヴェルテルの悩み』の十五年後、偶然にフランス革命が起つたということではなく、ゲーテの『ヴェルテル』及びそれを包括する啓蒙主義と、フランス革命との関係を、また啓蒙主義の燦然たるがゆえにそれだけ一層悲劇的な性格を結論づけているのである。

資本主義の発展は封建制度の根底をゆるがし始めるが、封建的身分を打倒するにたただけの力(経済的政治的道德の一切の総力)は、まだブルジョアジーの中に蓄積されてはいなかった。封建的身

分とブルジョアジーとの力関係に應じて、両者の様々な妥協の段階や、市民階級の貴族への抵抗が生じる。

こうして啓蒙主義は、素朴な唯物論をイデオロギーとした反封建主義斗争である。啓蒙主義の本質は、「宗教、神学的に感染した哲学、封建的絶対主義の制度、道德の封建的宗教戒律などに対する容赦ない批判」(『ヴェルテル論』S.18 P.27)であり、封建制度を打破することにより、人間の全面的発展を獲得しようという英雄的幻想である。——これが幻想であることは、フランス革命から生れたものが「理性の王国」ではなくして、ますます矛盾の激化するブルジョア社会であるということによつて、完全に暴露されるのである。

さて先進国である十八世紀イギリスのロマンの中には、資本主義によつてなされた生産力の進歩的解放の敘事詩的反映がある。我々は即座に『ロビンソン・クルーソー』を想起することができる。しかし人間が行動により全的人間にまで高まりゆくことは、資本主義的現実の人間関係においては困難であり、ロマンにあつては敘事詩が分解崩壊して、分析や敘述、また諸人物の主観の集中的表出である抒情にならざるを得ない。こうして「主人公の偉大さではなくして、貴族の迫害と誘惑に対する抵抗が筋の中心にある時、市民階級の積極的典型を純粹に積極的な方法でリアリストイックに形象化することを、事情によつては可能にするものは、封建的遺制に対してたたかう階級斗争の特定の具体的局面だけである。」(『シラーの近代文学理論』S.86)この最も典型的なものがドイツ啓蒙主義文学、『エミリア・ガロットティ』(レッシング)、『ヴェルテル』(ゲー

テ)、『たくらみと恋』(シラー)という作品系列にほかならない。市民的ヒューマニズムの素朴な発展期が最高段階に達した、フランス革命の朝やけと、フランス革命という一大転換期の夕映の時期に、ドイツはヨーロッパにおけるイデオロギー上の主導権を握った。シュトゥルム・ウント・ドラングを啓蒙主義に含めつつ、『ゲーテ、シラーの青春期は革命前の啓蒙主義時代の最後の芸術的頂点である。……それに対してゲーテ、シラーのいわゆる古典主義時代は、ブルジョアジーの革命後の芸術発展期の最初の頂点である。』(『シラー』ゲーテ往復書簡 S. 50) とルカーチは述べる。もちろん「この革命後の時期の最も偉大なリアリティックな形象者はバルザック、スタンダールであり、ハイネの中にヨーロッパ的意義を持つ最後の代表者を見出す。」(同上)

悟性対感情の名のもとで、啓蒙主義とシュトゥルム・ウント・ドラングが対立したものと一般に把握されているが、ルカーチは両者を総括して把握、市民的な感情・悟性による、封建主義への仮借ない批判だと見る。そして「ドイツ啓蒙主義において非合理主義だといわれる時流になったものは、大抵は弁証法への助走、その時まで支配的だった形式論理学を克服しようとする試みである。」(『ゲーテとその時代』の「序文」S. 13 P. 18) 感情に対する悟性でもって、また反フランス主義という排外主義でもってレッシングという最大のドイツ啓蒙主義者の特徴づけることがいかに間違っているかを、ルカーチはメーリングの『レッシング伝説』をふまえながら到るところで分析する。「レッシングはコルネイユ、ラシーヌ、ヴォルテールのドラマの抽象的観念化に反対するたたかいをシェイク

スピアの名において行うが、それは古代文学、アリストテレスの詩学の真の要求は、(ソフォクレスの場合と同じく)シェイクスピアの場合にその精神が実現されており、それに反してこの要求の文字通りの実現がフランス擬古主義者の場合には抽象的戯画を生み出すということに基く論証によつて行われる。」(『シラーの近代文学理論』S. 93)「フランス擬古主義のレッシング的批判」は、「封建主義とブルジョアジーとの必然的連絡体としての、ブルジョアジーと貴族との間の階級妥協を伴う絶対的王制の拒否」(『同上』S. 93)であり、具体的に云えば、「コルネイユの場合、悲劇的なものの概念は非人間的であること、コルネイユは人間的情緒、人間の感情生活を意に介しないこと、彼は当時の宮廷的貴族的因習にとらわれて、純粹に悟性的な生命のない構成を示すこと」(『ヴェルテル論』S. 19 P. 23)である。これが現実においては、ヴェルサイユを猿真似したドイツ諸侯の絶対主義的小宮廷とその文化への批判となる。

レッシングを引きあいにし出し、その文学斗争における理想像は古代文学であると右に述べた。それは「特殊なもの、感覚的リアリティックな形象化と、一般的『本質的なもの』の明確な浮彫との統一が存在していた」(『シラーの近代文学理論』S. 93)からであり、古代ギリシャのポリス民主主義を近代に再興しようという市民階級の政治的理想と一体をなすものである。「ポリス民主主義の実現は革命的な未来の課題として可能であり、市民階級の革命的要求の貫徹は市民階級の経済的存在の基礎となつている現実的矛盾の止揚に通じうる、という二重の幻想」(『同上』S. 93)を孕んでいるが、しかし浪漫派が資本主義社会の矛盾を中世へ、即ち分業による

矛盾が人生に登場しない段階へ引き戻すことによつて解消しようとするのに対立させると、古代ギリシヤはやはり進歩的市民階級の未来の課題としていきいきした理想であつた。

古代ギリシヤ再興の政治的・社会的理想が幻想である以上、古代の下部構造の上に花と咲いたギリシヤ文学を理想とする近代文学の努力は、輪をかけた幻想でしかないわけだが、この努力は啓蒙主義の良き伝統に基く二人の天才、ゲーテ、シラーによつて別の方向に開花する。このことは次章で述べることにする。

ドイツ啓蒙主義文学のかけがいのない創造性は、言うまでもなく、市民階級の封建身分に対する激烈な反抗を定着したことにあるが、更に、「社会的諸関係のリアリスティックな形象から、諸関係に周知であるものを有機的に発展させることが試みられた」（『同上』s. 86）ことにある。しかしこの場合も、「止揚し難い偶然性や、止揚できる偶然性が、性格の特殊な諸特徴や私的運命にたえずこびりついている。レッシングが『エミリア・ガロットティ』の結末で、解き難い心理的偶然性の迷路に迷い込んだのは偶然ではない。それは若いシラーのドラマが、偶然に成功したり失敗したりするありそうにもない陰謀のもつれを、形成せざるをえないのと同じである。（同上）」こういう、前にも述べた一種の主観化、観念化は、社会の封建的身分関係を打破せずにはおれない積極的主人公を、その主観的意図の英雄的美しさによつて形象化しようとしながらも、その現実手段が見出しえないことから生じる私的主観性が、客観的身分関係と鋭く対立すればするほど、ますます強まらざるをえない。なぜならば、当時のドイツの封建的身分関係は、現実の力関係において、啓蒙主義者が願うほど容易に崩壊するものではなく、政治的解決によらねば解決できないものであつたから。しかも我々の知る

ように、殆ど全ての啓蒙主義者は、フランス革命をそれから生れた市民社会という内容的結果のみを肯定しつつも、その内容実現の革命的平民的方法を拒否している。

シラーには特にこの主観化の傾向が強い。『群盗』の主人公、「フランツ・モールの悪しき格率は彼自身の中においても坐折し、彼は宗教と道徳とを勝利者として認めざるをえないということに、筋はなつてしまふ。（『シラー美学』に s. 23）」そして「ドン・カルロス」においても、ドラマの葛藤は相対立する格率の葛藤であるという観念化が行われている。しかしこの作品においては、レッシングの『エミリア・ガロットティ』の王子に見られる、絶対的支配者の弱々しい善良さが被支配階級に対して犯罪を犯すことになるという、人物の偶然的な個人的性格による悲劇ということを遙かに凌駕している。フィリップは支配階級の根源の人物であり、その背後には更に大宗教裁判官があり、それとのドン・カルロス及びボース侯爵の対立は、「世界史的諸力がその最高の代表者の中で測られ、」シラーはここでは——思想としてよりは芸術として意識的に——歴史的弁証法の予感に達する。（『同上』s. 24）

他の啓蒙主義者ももちろんであるが、「シラーが禁欲的・観念的の革命家として、ドイツの封建的・絶対主義的社会に対してたたかっていた限り、敵を社会的・道徳的な類廃・墮落の総体として描出することは、彼にとつて自明であつた。しかしすでに『ドン・カルロス』の時期における創作危機は、たたかう両派の主観的権利をドラマティックに形象化することを努力したということに、本質的に関係している。……シラーのこの発展はもちろん、彼の青年期の革命的

理想から離反することによつて規定されている。しかし看過してならないことは、この發展はもう一つの面を持ち、それは同時に重要な前進發展を現わすことである。シラーは人間社会の總括的でとられない全体の考察をその動向の中で努力する。そしてこの動向の中で様々のたたかう諸力が、——詩人のそれに対する態度とは關係なく——その社会的必然性において、従つてその主観的權利において形象化される。こうしてシラーは、後にヘーゲルの悲劇理論において頂点に達する方向へと理論的に進む。」「同上」S. 260 傍点筆者)

主観的な革命意識の点では、ゲーテはシラーより遙かに劣つてゐるが、宮廷に対するゲッツの態度、ヴェルテルの封建的身分への反撥と下層の人々への愛情、グレートヒェン悲劇におけるグレートヒェンとファウストとの身分關係などの中には、明らかに啓蒙主義一般に見られる反封建斗争が描かれている。善良なアルベルトと自殺論争をする時、「暴君の堪え難いくびきの下に呻吟する民衆が、遂に激昂して鎖を断ち切つても、あなたはそれを弱いというのですか」と叫ぶヴェルテルの言葉、またヴェルテルの自殺後、机の上に開かれていた本が啓蒙主義の頂点を示す『エミリア・ガロット』であることを指摘すれば十分である。

ところで若いゲーテの『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』『ヴェルテル』『ウルファースト』という文学活動は、一方において右のような啓蒙主義の精神に充ち溢れているが、同時に他方において、啓蒙主義を越えた深い洞察を秘めている。

前述のように、啓蒙主義の理想は人間性の全面的發展というヒュ

ーマニズムであるが、この理想は分業による資本主義社会の發展の過程で、市民社会の日程にのぼつて来たものである。そしてこの理想を実現するには何よりも先ず、封建的身分關係が打破されねばならない。そして市民的身分の者が封建的身分の者に対する抵抗は、適切な文学的素材である。なぜならばこの抵抗の中に、日常的な狭隘な散文性を克服する美しい英雄の人間像を浮かび上らせることが可能であるからである。こうして啓蒙主義者の文学的实践は、何よりも先ず、封建的身分への英雄的暴動を形象化する、ということは、ルカーチの言葉を前に引用して既に述べたところである。

ところが資本主義社会による封建社会の克服ということは、一方では個人の全的人間への發展を約束するかのように見えながら(部分的には実現しつつある)、他方において限りない分業化、人間の細分化に通じるということを、若いゲーテは明確に認識する由もなかつたが、彼の文学的实践においては、一方では封建的身分社会を批判しつつ、他方ではまた市民社会の散文性を、早くも予見している。「規則の利点について言えることは多いが、それは市民社会を賞めるために言えることみたいものだ」と規則や市民社会が人間をいかに歪めるかをヴェルテルは語り、ロットと別れて実務についた公使館では、周囲の小市民的根性のために、有能な才能が逆にヴェルテルを傷つけることになる。

『ヴェルテル』はいうまでもなく恋愛小説であるが、「個性發展のためのたたかいの偉大な問題の全てを有機的に連関させることに成功している」(『ヴェルテル論』S. 27 P. 43) この世界的な恋愛小説の中には、市民社会における恋愛と結婚との矛盾がまた形象化さ

れている。一方では社会的地位の確固とした有能なアルベルトとの結婚を欲し、他方ヴェルテルの全的人間性に惹かれるというロッテの内側の矛盾である。しかもロッテが理想的な様々な性質をそなえた女性であればあるほど、恋愛と結婚との市民社会における矛盾は深刻である。

啓蒙主義の英雄的幻想の暴露の予見が、ゲーテの中では早くも文学的諸形象となる。だからこそルカーチは、「ゲーテの青春期の偉大なロマンは……革命的ヒューマニズムの理想の声明であるばかりでなく、同時にこの理想の悲劇的矛盾の完全な形象化である。」(『同上』S.26 P.43)と云う。

もつとも十九世紀前半の大リアリスト達が、資本主義の普遍化される中で、大胆に市民社会の本質を暴露してゆくのに比較すると、「ゲーテは後に明らかになる偉大な悲劇の仄かに光る輪廓を形象化するにとどまる。だから彼は自分のテーマを、拡りからいうと非常に狭い枠の中に持ち込むことができる。それゆえ、テーマ的に、ゴールドスマスやフィールディングふうに、殆ど牧歌的閉鎖的な小さな世界の描出に限ることができる。」(『同上』S.27 P.43)

(III)

『ドイツ文学における進歩と反動』の中でルカーチは云う。「容赦ない真実性と美との結合こそ、古典主義の頹廢、即ち擬古主義とアカデミズムとは反対に、古典主義の本質を作り出す。」(S.30 P.31)

つまりドイツ古典主義はゲーテ、シラーの共同活動の一七九四

年から一八〇五年の、フランス革命後の最初の頂点である僅かな期間に過ぎない。しかしヨーロッパ文学におけるその役割は、十八世紀啓蒙主義から十九世紀前半のリアリズム小説への懸橋の役割を演じる。

フランスにおいては革命の内部矛盾が激化し問題になっている時、経済的政治の後進国ドイツでは、人類一般という抽象的なたちで進歩的な市民階級の立場に立つて問題が提出され、その問題が純粹にイデオロギー的な分野において解決される。そのために封建的身分社会を打破して人間を全面的に發展させようという啓蒙主義のすぐれた理想は、観念的ユートピアの性格を持つ。即ち前述したような、革命的平民的方法による革命を拒否しつつも革命の内容だけを獲得しようという、ユートピアの性格である。

ゲーテ、シラーの共同活動の中心問題は、近代詩人が近代生活を文学的に表現する市民的古典的方法は何かという問題であり、この解決を古代文学の研究から引き出そうとする。しかしこれは単なる形式の問題ではなく、内容と形式との相互関係に媒介されて提出された問題である。というのは、後にますます明らかになるように、市民社会は本質的に芸術に敵対した性質を帯びているからである。

資本主義が一方では生産力の發展により個人を封建的桎梏から解放するとともに、他方では資本主義社会における人間関係の本質を見誤らせ、現象と本質との相互関係を見失わせ、社会全体が二つの階級に分裂してゆくのみならず、個人そのものも公的なものと私的なものとに分割されてゆくのであるが、こういう細分化された個人を芸術の対象にし、しかもその人間関係は本質にまで突き入って

は把握され難いという資本主義社会は、まさに芸術にとつては不都合な、敵対的性格のものにはかならない。

啓蒙主義の英雄的幻想が消え去った後、ゲーテ、シラーの芸術理論の探究が行われる。第一の方法は、古代形式を変形することで近代社会における全的人間への道を描く形式を見つけることであり、第二の方法は古代形式を永遠の芸術形式だと考え、この形式に近代的内容を盛り込むことで内容の散文化を克服しようという方法である。

第一の方法は啓蒙主義から十九世紀リアリズム小説へ橋渡しをする教育小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』を生む。ゲーテは啓蒙主義の伝統を引き継ぎ、絶えず進歩的な見解を持ち続ける。彼は革命後世界史の前景にあらわれた市民社会の内容に賛意を表し、ルネッサンス以来啓蒙主義に到る進歩的文学が全てその前進にそれぞれ努力した全的人間への発展を、市民の子ヴィルヘルムを設定し、その主人公を人間の高みにまで教育により高まらせることで、描こうとする。

しかしこのプログラムは極めてユートピア的なものである。ゲーテ、ケラーの意味での教育小説が発生しうる唯一の機会は、個性と社会とがまだ和解し難く敵対的に衝突していない時であり、教育、個性の改造、始めに与えられた性質と志向との改造、間違つた傾向の克服が個性の成熟化、豊富化を意味し、同時に捻りある社会的協働への高められた有能さを意味する時であり、『風習』が個性に対してまだ人間の相互関係のいきいきした合生力として現われ、でき合いの死んだ非道徳的な『遊戯の規則』としては現われない時であ

る。』（『ゴットフリート・ケラー』S.209）社会の利害と個人の利害とが一致し、個人の人間の発展が社会の進展と合致するという市民社会への信頼は、結局幻想でしかないのだが、啓蒙主義がイデオロギー的に目指し、フランス革命となつて登場したこの幻想、いつてみれば「フランス革命の夕映え」の中に生れた『修業時代』は、極めてユートピアの性格を持つものとなる。またそのために、『修業時代』における教育は、政治的行為を目指すものではなくして道徳の高まりという抽象性を帯びるのである。

『修業時代』において貴族がすぐれているのは、道徳的人間的に自己を高めるべく努力する余裕があるからに過ぎない。だからロマンの頂点に資本主義的農業を営む試みがあるが、貴族ロタリオはその際に、自分の貴族の特権の自由放棄を宣言する。同時に貴族と市民との三組の結婚でロマンは終るのである。

このユートピア性はシラーの場合に遙かに著しいが、ここでは『ヴィルヘルム・テル』の結末を指示するにとどめる。「下僕一同を解放することを宣言する」とルデントは叫ぶのである。

このようにして内容的に全く新しい世界史の上に立ち、啓蒙主義から十九世紀リアリズムへの橋渡しをするこの『教育小説』は、形式的にも十八世紀と十九世紀との懸橋となつている。筋の謎が一連にして解けたりする、緊密さの乏しい構成、また『塔』の結社などの技巧上の道具立は、十七八世紀の小説に見られるものである。と同時に幾つかの劇的場面に筋を集中して人物と事件との結合が戯曲に近くなつているが、これは後にバルザックのスタンダール批評において、近代ロマンの特徴として十八世紀小説に対比させられるもの

である。このことはしかし後にまた述べることにする。

古代形式に現代の内容を盛りこもうとする第二の方法の代表作には、『ヘルマンとドロテア』をあげることができる。ゲーテは古典的単純さ、明確さに達し、シラーはこの作品の形式の完結性を称讃し、『ヴィルヘルム・マイスター』に反対する。しかし形式の面からのみ見て古代叙事詩の復活と思つた『ヘルマンとドロテア』は、決して古代の英雄叙事詩ではない。それは、『我々の諸力が運動と活動とを旨指す時ではなく、我々が安息を必要とする時にだけ愛し探しだすことができる』*牧歌である。この様式化はシラーの場合に著しく、近代社会の公的性と私的性との分裂を統一すべく古代的艺术形式を生かそうと、合唱を『メッシナの花嫁』に取り入れる。しかし芸術内容である社会的現実の分裂を、形式によつて統一しようという試みは見事に失敗し、『メッシナの花嫁』は運命劇になつてしまふ。

*シラー『素朴文学と情感文学について』

シラーは後期のドラマで国民的統一の問題などを、時代の大問題を形象化するけれども、彼の傾向は観念化、様式化の危険を多分に孕んでいる。一方では封建制度を平民の革命的方法で崩壊させることの拒否、他方では観念的哲学による彼の問題設定の歪曲から、この危険は生じる。

カントが主観的観念論者であつたように、その影響下にあるシラーも『素朴文学と情感文学について』の中で、古代の素朴文学と近代の情感文学という社会的歴史的發展の段階に基く相違を、詩人の側の相違、感覚方法の相違へと主観化してしまふ。それにも拘らず、『シラーは……主観的観念論と客観的観念論との間の過渡的現

象として把握されねばならない。シラーの哲学の過渡的性格は特に、彼がカント美学の非歴史的方法を遙かに越えているという点で明らかである。新しい方法、美的主体の能動性の分析は、彼の場合明らかに歴史的問題になる。……『素朴文学と情感文学について』の中で、始めて哲学的立場から、新芸術と旧芸術との対立の問題を提出し、新芸術の生存権を明らかにしようとする。』（『ヘーゲル美学』S.100）

古代と近代との対立の中から、『現実の模倣』と『理想の描出』という対立を導き出すことは特に重要である。古代のように現実そのものが統一ある詩性を保持する時には、『現実の模倣』がそのまま詩性を保持できるのであるが、本質と現象、公的性と私的性、階級分裂という、統一を失つた近代社会においては、『現実の模倣』が現象面を這い廻る自然主義へ墮してしまふ危険が多分にあるからである。だからして『理想の描出』は近代におけるリアリズムの危機に対する深い洞察の出発点である。こうして情感文学の三つのジャンル、諷刺・悲歌・牧歌は近代市民社会の散文性を文学内容とする時の、詩的高みへと統一する原理になり、シラーの提出している問題は、シラーの観念的立場では解決できないけれども、『感覚的な直接性において本質を形象化する現象形式を、芸術として要求する問題』（『シラーの近代文学理論』S.80）を含んでいるのである。こうして市民社会の散文性から生じるシラーの美学的規定は、やがてヘーゲル美学に受けつがれてゆくものである。

シラーは現実と理想との対立において、近代リアリズムの問題を提起している。一方においては『現実の模倣』が自然主義になり、他

方においては「理想の描出」が主観化になるという、近代文学の両側面からの危機を克服することはシラーにはできない。これは本質的なものの認識と現象的なものの感受という二律背反のカント哲学の影響から脱することができなかつたからにはかならない。こうして歴史的諸段階を抽象的な感覚方法へ主観化することが起るのであるが、このことはまたヘーゲルの先駆者にふさわしい。しかし王政復古期のヘーゲルが市民社会の芸術に絶望しているのに対して、「フランス革命の夕映え」の中にいるシラーは、素朴文学と情感文学の統一を更に企てる。そして資本主義社会の純粋な形式は資本主義の矛盾の止揚に通じるだろうという希望を抱き、その方策として、貴族の美的倫理的教育による人間変革によつて市民社会は限りなく人間を高めてゆくだろうという幻想を抱く。これが『ウィルヘルム・テル』を貫くシラーの世界観になつてゐる。しかしこの幻想は市民社会の発展とともに暴露され、ヘーゲルにおいては資本主義社会の経済構造の洞察から、芸術に対する一切の幻想は消え去るのである。

シラーのこの幻想性は『人間の美的教育について』の中を貫流する。シラーの芸術歴史哲学の基本的モチーフは、『美的文化が、分業による人間の分裂、細分化を再び止揚し、人間の完全性と全体性を再興する、という課題を持つ。』（『シラー美学に』s. 26）そして、「ゲーテは現実的な社会的行為の形式においてのみ、人間の精神生活の内的変化を——自由意志による封建的特権の精算を——考えることができる。だからゲーテの場合、社会的ユートピア主義への助走が存在する。……他方シラーの場合、時折は適確な社会批判にも拘らず、変化の夢は純粹に内的なもの、倫理的・美的なものにとど

まる。』（『同上』s. 26）こういうゲーテとシラーとの相違、即ちユートピアへ達する過程が社会変革であるか人間変革の先行であるかの相違が、そのまま『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』と『ウィルヘルム・テル』との相違である。

ヘーゲルへの助走としてのシラーに関し、今一つ触れておかねばならないことは、「遊び」の理論である。『人間の美的教育について』の第十五信で言う。「人間は完全に文字通り人間である時だけ遊び、そして遊ぶ時だけ人間である。美とは観照の問題ではなくして実践（シラーの場合、もちろん観念の実践である）の問題であるという洞察が一方にはあり、また他方では近代社会においては勞働と遊びとが統一されずに必然的に対立させられていることへの批判がこめられている。そしてここでもシラーはカントからヘーゲルへの道となつてゐる。

啓蒙主義から古典主義を経て十九世紀リアリズムへの道は、『ファウスト』の生成の中に見ることが出来る。『ウルファウスト』は啓蒙主義的なグレートヒェン悲劇を中心にしてゐる。しかしこの中にもすでにレッシングを越えた弁証法への胎動があるが、一八〇六年に完成された『ファウスト』第一部では、個人の運命を越えた歴史の法則への洞察が深まり、『小世界』に対する「大世界」を必要とすることになり、第二部が書きつがれ、こうして最初のグレートヒェン悲劇は人類のドラマに発展する。

『ファウスト』が「比類ない作品」とであるということは、第一に内容的に云つて、全人類のドラマがファウストという個人に体现されてゐるということである。このことは歴史の客観的な弁証法的法

則が把握される以前には不可能だつたし、近代社会の複雑な矛盾が展開されるそれ以後では、一般的な人類史の表現は不可能になつてしまふということである。

『リアリズム文学観の中心的範疇と基準とは、性格と局面とに關する典型が、一般的なもの個別的なものとを有機的に総括する独特な綜合である。典型とは、それが平均性を持つているために典型になるでもないし、——どんなに深められていようと——單に個人的に過ぎない性格によつて典型になるものでもない。典型が典型になるのは、その中に、或る歴史的時期の持つ、人間の社会的に本質的な、規定的な一切のモメントが、出逢い、交叉することによつてであり、典型創造がこれらのモメントをその最高の發展段階において、その中に隠れている可能性を最も極端に發展させながら、人間と時代との全体性の頂点と限界とを同時に具体化する極端な人物を極端に描出して、示すということによつてである。』（『バルザックとフランス・リアリズム』の『序文』S.89 P.6 傍点筆者）

この『本質的な規定的モメント』を描出することが、市民社会の進展とともに困難になつて来る。こうして十九世紀ロマンにはバルザックの言うように戯曲的要素、紋景、描写、對話などの様々な要素が入つてくる。こうしてゲーテとシラーが文学形式について共同研究した中から導き出した敘事詩的なものとドラマ的なものとの混淆が一般的方法になり、古典的形式は崩壊するのであるが、この古典的形式の崩壊による近代ロマンの發生への結節点に、『ファウスト』は立つている。

シラーはゲーテに宛てて「貴方がおつしやる一切のことから私に

ますます明らかになることは、部分の独立性が敘事文学の主要性格を作り出すということです。*と書くが、『ファウスト』はその意味で敘事詩的で且つドラマ的である。それは「人類發展の典型的諸段階は悲劇の連鎖であると感じるが、それらの關係と全体性はもはや悲劇的ではない」（『ファウスト研究』S.102 P.224）という人類史の内容から規定されたものである。『ファウスト』は「どの部分もドラマ的である。というのは（人類の一發展段階の）一人間典型の運命は、そこでは我々の眼前で、その内的矛盾の内在的弁証法により決まるからである。……またどの部分も敘事詩的である。というのは、僅かな場面で描かれた人物に、個人にして同時に發展段階の典型であるという必然的な証明を与えるためには、諸葛藤の社会的環境、社会的事物の静止している周囲の世界は、ドラマの完全性、純粹にドラマ的なものを遙かに越えてゆく敘事詩の完全性を得なければならぬからである。」（『同上』S.103 P.224-5）

* 一七九七年四月二十一日のゲーテ宛書簡

ゲーテは『敘事文学と劇文学について』の中で、「敘事詩人と劇詩人との大きな本質的相違点がどこにあるか」といふと、敘事詩人は事件を完全に過ぎ去つたものとして歌い、劇詩人はそれを完全に現在として表現する」といひ、行為を促す前進的モチーフの中に劇的行為を見、行為をその目標から遠ざける後退的モチーフの中に敘事的行為を見ているが、このことは重要なことである。というのは、ロマンの主人公は積極的人物であり得なくなつて、近代文学のジャンルへの見通しがここには含まれているからである。ゲーテに關して言えば、『ヴィルヘルム・マイスター』の主人公と、みづから全人類史の悲劇を體現してゆく、最後に、「自由な土地に自由な民衆

とともに立ちたい、」とメフィストフェレスの魔術から自分を解放しようとしたかうファウストの積極的な劇的性格との相違である。

註釈的な操作なしに、純粹に美的な形象として文学作品を作り出そう、しかも社会的歴史的内容をそれに盛りこもうというゲーテの努力は、「芸術時代」の最後を飾るにふさわしい作品を生み出したのである。

まずまず散文化される市民社会に対して、浪漫派も対立的である。(ルカーチが『ドイツ文学における進歩と反動』の中で、「敵味方の両者に屢々現れる、浪漫主義評價の根本的誤謬は、その中に封建的運動を見るところに誤謬である」(S. 98 P. 153)「浪漫主義も浪漫主義的反動も、近代的……国家へのドイツの変化を欲する。しかし絶対主義の破棄や封建遺制、封建的特権の除去なしにそれを欲するのである」(S. 51 P. 25)と述べているのは、政治的経済的な近代化を欲することである。しかしこうして散文化された現実には、そのまま芸術的には文学に敵対的である。)こうして文学のテーマは、資本主義の矛盾の目立たない商品経済の中世へと廻り、また「古典的形式の古い純粋性、単純性ではもはや克服されえない近代市民生活の矛盾の高まりから、ジャンルの弁証法的相互作用、相互豊富化の傾向が生じる。」(『シラー||ゲーテ往復書簡』S. 60)更に現実の矛盾の本質に突き入ることなく、現実の観念化、主観化が行われ、異様なもの、反語的なものに膨張する。しかし繰り返して述べているように、自然主義の危険へ陥らないためには、「人生のたたかいそのものの中に社会的||人間的意義を発見し、それにふさわしく芸術的に高める(バルザックの方法)か、形象化された事件

の人間的重要性からは独立的に、背景の記述を絵のように美しく||修辭的に誇張する(ウィクトル・ユーゴーの方法)か」(『ゾラ生誕百年祭』S. 97 P. 153)の二つの道しかない。この前者がリアリズムであり、後者が浪漫主義であることはいうまでもない。しかしだからと言って、偉大なリアリストは、人間関係の本質を暴露し、全の人間へのたたかいを描くに際し、浪漫的要素の一切を拒否するということはない。のみならず、バルザック、E・T・A・ホフマン、ハイネらは、積極的に、「浪漫的要素、即ちグロテスクなもの、幻想的なもの、奇妙な||醜いもの、反語的或いは悲愴的に誇張されたものなどを、本質的な社会的||人間的諸関係をリアリストイックに描出する時にだけ利用する。」(『同上』S. 98 P. 154)

このことはリアリスト、ゲーテの場合にもあてはまる。手法的に浪漫的なヘレナ悲劇の中に、ゲーテのリアリズムがある。『ファウスト』はあくまでファウスト個人を主人公とする。しかもファウスト個人を通して、ファウストが私的なものと公的なものとを統一的に体現した全の人間に高まろうとする筋を通して、市民社会の私的生活に内在する悲劇、封建社会の腐敗に対比されて登場する古代的美の理想の悲劇、発展してゆく近代資本主義社会での悲劇という、全人類史を描き出している。古代的美を近代においてそのまま復活しようとするのが悲劇に終らざるをえないということを描くために、そういう空想的な局面を『ファウスト』においていかにも自然的に思えるように再現することを必要としたために、ヘレナ悲劇は必然的に幻想的形式をとらねばならなかった。だからこそ、「幻想的局面から、またその局面によつて高められた個人的性格から、問

題は難なく、人類的なものの高みと典型とへ高まつてゆく。」(『プ
アウスト研究』S.146 P.124)こうして社会発展の本質、歴史の
法則性が、作品の中で明らかにされる。

ルカーチの文学理論はリアリズム文学理論であり、文学をリアリ
ズムに高めるものは、局面と性格における典型の創造にほかなら
ない。だからしてジャン・パウルの民衆性にも拘らず、ゲーテ、シ
ラーの静観的な文学の方が遙かに歴史の弁証法的発展を文学的に定
着しているがゆえにこそ、ゲーテ、シラーをジャン・パウルより高
く評価するのであり、啓蒙主義から古典主義への前進発展について
も、このことを語っているのである。

最後に、「テルミドール後の現実に妥協しない」(『ヘルダーリ
ンのヒューリオン』S.111)ヘルダーリンについては、ルカー
チの言葉を引用するにとどめよう。

全的人間への発展の啓蒙主義の夢が、単なる夢に終つてしまつた
ドイツの惨めさの中で、ゲーテとヘーゲルは市民的発展の革命期の
終了に適應し、歴史の弁証法的発展の法則を文学的に或いは哲学的
に打ち立てて行くのに対し、ヘルダーリンは非妥協的態度のために
絶望的な袋小路へ陥らざるをえなかつた。「ヴァイルヘルム・マイ
スター」が十八世紀のフランス・イギリスのブルジョア・ロマンの
社会的問題、様式の問題から有機的に生じるのに対し、ヘルダーリ
ンは、市民階級による生活の変革という革命的理想から、シトワ
イヤン叙事詩を形成することが試みられるところで、問題の糸口を
受けとる。(『同上』S.126)「シトワイヤンを叙事詩的に形象し
ようとする試みは坐折せざるを得なかつた。しかしこの坐折から、

比類のない抒情的・叙事詩の様式が、即ち英雄的『自己欺瞞』の光
が消えた後の市民世界がうらびれていることに對する、深い告発の
様式上の客観主義が生じた。殆ど『隱喻的』にのみ行為が充ちてい
る抒情的なヘルダーリンのロマンは、このようにして市民的発展の
中で、様式として孤立している。」(『同上』S.125)

*

最初の予定では、「三」の次に「リアリズムと自然主義」「社
会主義リアリズム」「結び」のそれぞれを内容とする「四」「五」
「六」が続くはずであつたが、「四」以下は次回に廻すことにした。
そのため「結び」の章にかえて私見を書き添え、一応の区切りとし
たい。

*

『バルザックとフランス・リアリズム』への『序文』の中で、「全
的人間のいきいきした形象化は、作家が典型を創造することを目標
とする時のみ可能である。」(S.11 P.10)と言っているが、典
型の創造はどのようにして可能であるか。ルカーチはこれについて
『ゴットフリート・ケラー』の中で、ノヴェレ、ドラマ、ロマンに
ついて次のようにいう。

「ノヴェレは、焦点で総括するように、並みはずれた個人的事件
によつて、社会生活を総括しなければならない。」(S.186)即ち、
「個人的偶然のモメントと社会的必然的モメントとの交差点を、ノヴ
エレの尖端点、展開における弁証法的転換点とする」(S.197)ことに
より、人生の挿話にすぎない個人的事件が、実は歴史的社会的に本質

的なことであるということが、感覚的に暴露されることになる。だから、『ノヴェレ』の基礎になつてゐる人生の一断面は、人生の個々の現象の中の偶然と必然との間に存在する關係において、必然と偶然とを出現させる。全体の法則的關係はただもう隠されておき、背景としてののみ、全体性への見通しとしてののみ、含まれてゐる。ノヴェレの芸術的平衡を覆さないように、全体の法則的關係は全く語られないままになつてゐることさえある。」(S. 202)

それに対して、『ドラマはヘッベルが適切にいうように、『人生の過程そのもの』を表現する。だからドラマにおいてはどんな偶然も止揚されていなければならない。それは人生の過程の總体が、全体の法則的経過の必然性の中で偶然を止揚するのと、全く同様である。」(S. 202) かつて『ドラマは……偉大な敘事詩のようには包括的な『客体の全体性』を要求しないけれど、本質的規定・關係の全体性において、社会生活の決定的葛藤を表現することを要求する。」(S. 198)

資本主義的散文化が普遍的になつた社会で、『近代敘事詩』が典型を創造するには、『個人と社会との葛藤、社会の(少くとも外面的な)最後の勝利が眞のロマンの内容を生み出すので、個人は社会的現實を把握するために、到るところ案内されねばならない。』(S. 208) 文学の内容が最も芸術的に表現される形式が、敘事詩、ドラマ、ノヴェレ……というジャンルである。そのことの確認の上で、ルカーチはそれぞれのジャンルにおいて文学がリアリズム——即ち、現實生活の本質と現象との芸術上の弁証法——に高まつてゆく原理を追究してゐる。

『十九世紀ドイツ・リアリスト達』に収められた諸論文を一覧すると、喜劇とノヴェレにおけるクライスト、牧歌によるアイヒェンドルフ、劇作家ビュヒナー、諷刺作家ハイネ、そしてノヴェレとロマンがクラー、ラーベ、フォンターネと展開される。そしてそれぞれの論文は、ゲーテとシラーとが近代文学を生み出すために討論した文学理論を、またヘーゲル美学におけるロマンの理論を軸にして展開されてゐる。

ヘーゲルの『美学』ハンガリア版の序文として書かれた『ヘーゲル美学』では、スターリンの『マルクス主義と言語学の諸問題』まで含めてのマルクス主義美学の現在の到達段階に立つて、啓蒙主義、カント以来の美学の発展の成果が総括されてゐる。

ルカーチは批判された後、ソヴェト文学についての論文を精力的に書いた。ルカーチのソヴェト文学の評価については次の機会に譲るとして、ここでは『世界文学におけるロシア・リアリズム』の『第三版への序文』から引用を試みよう。『ソヴェト文学を科学的に扱うことができるためには、重要な作品すべてを正確に知らねばならないというだけでなく、社会的意味・芸術的意味における發生史、個々の作品に対する批判の態度の変化、その影響史、重要な作家の外的及び内的發展、芸術の方向を決めるたたかひにおける内輪の關係などを知らねばならない。ソヴェト文学の巨大で決定的に重要なこの分野の私の認識が、隠やかにいえば、極めて断片的で不十分であつたということをよく知つていたので、この問題を公に扱うことを尻ごみした。』(S. 14)

それにも拘らず、ルカーチは批判にこたえて数多くの論文を書い

たのであるが、現代の作品を扱う過程で、それまでの文学批評とは違つた次元に立つことになつた。『マルクス・エンゲルス芸術論入門』においては、戦争直後の理論的水準で、美学における問題が整理されているが、『バルザックとフランス・リアリズム』の『序文』においては、問題が意識的に展開される。(十分に展開され、発展させられたかどうかは別問題である。)『作家の世界観のより深い層と表面の層』という「リアリズムの勝利」に関する問題の究明への努力を指摘すれば十分であらう。

ルカーチ美学の立場は、機械的或いは俗流唯物論的な反映論ではない、弁証法的唯物論の反映論であるが、一九四〇年代までに書かれた諸論文はグーテ、シラー、ヘーゲルの理論を軸にして書かれていくということの指摘は重要である。現段階から光をあてるのでなくして、歴史の背後から照らされた逆光の中に十九世紀から今世紀への文学を浮かび上らせるということのため、ルカーチの鋭い理論にも拘らず、現在の創造への積極的な働きかけになることが非常に困難である。(ルカーチが創造的立場に立つていないため、彼の論理から直接創造に有益なものが引き出し難いが、我々の努力で不可能ではない。)しかし前述のようにソヴェト文学の批評の過程を通じて、非創造的な過去の立場から、現在の文学創造に直接参加して行く立場へと変りつつある。そして一九五六年一月の第四回ドイツ作家大会での発言は極めてアクチュアルであり、過去から現在を照らすという立場を克服している。有益ではあるが客観主義的なルカーチの分析については以前に触れたことがあるが、*この批評の発想方法は、今日では克服されつつあると云えよう。

*拙稿「ルカーチの文学史理論」世界文学第九号

我々の手元にあるルカーチの諸論文はそれ自体有益であり、歴史的には文学の相対的独自性を強調し、反映論と作家の主観の能動性との弁証法的統一を具体的に打ちたてた貴重な足跡である。我々はこれら諸論文をふまえながら、より創造的に、文学を科学的に追究して行くことが必要である。

—1956. 10. 1. —

ルカーチ 著作目録

註

(1) 雑誌に発表されたのみでまだ単行本に纏められていないものは未収

(2) 既に発行されたものの中、左記のものは見ることができなかつたため、それらに取められている論文はこの目録には出ていない。

Geschichte und Klassenbewusstsein. Der Malik-Verlag. Berlin 1923.

Lenin. Der Malik-Verlag. Wien 1924.

Moses Hess und die Probleme der idealistischen Dialektik. Verlag Hirschfeld. Leipzig 1926.

Schicksalswende. Aufbau-Verlag. Berlin 1948. [一部は Probleme des Realismus に所収]

(3) 最近の版には次の論文が加えられているが、見ることができなかつた。

Unser Goethe. (Goethe und seine Zeit. Aufbau-Verlag. Berlin 1953年版)

Gedenkrede zum hundertsten Todestag Gogols. (Der russische Realismus in der Weltliteratur. Aufbau-Verlag. Berlin 1953年の第4版)

Vorwort. (Skizze einer Geschichte der neueren deutschen Literatur. Aufbau-Verlag. Berlin 1953.)

(4) Die Zerstörung der Vernunft. Aufbau-Verlag. Berlin 1954.
は何年に書かれたかを調べる余裕がなかったためこの目録には未収。

1907 Zur romantischen Lebensphilosophie : Novalis (Die Seele und die Formen/Essays.)

1908 Die Geschichte der Entwicklung des modernen Dramas. Platonismus, Poesie und die Formen : Rudolf Kassarner (Die Seele und die Formen/Essays.)

Die neue Einsamkeit und ihre Lyrik : Stefan George (ibid.)
Der Augenblick und die Formen : Richard Beer-Hofmann (ibid.)

1909 Thomas Manns Roman „Königliche Hoheit“ (Georg Lukács zum siebzigsten Geburtstag.)

Das Zerschellen der Form am Leben : Sören Kierkegaard und Regine Olsen (Die Seele und die Formen/Essays.)
Bürgerlichkeit und l'art pour l'art : Theodor Storm (ibid.)
Reichthum, Chaos und Form : Ein Zwiegespräch über

Lawrence Sterne (ibid.)

1910 Über Form und Wesen des Essays (ibid.)

Sehnsucht und Form : Charles-Louis Philippe (ibid.)
Metaphysik der Tragödie : Paul Ernst (ibid.)

1915 Die Theorie des Romans.

(風田記「小説の野説」未栄社)

1931 Die Sickingendeblatte zwischen Marx-Engels und Lassalle (Marx und Engels als Literaturhistoriker.)

(相原訳「芸術論」社会書房)

1933 Franz Mehring (Beiträge zur Geschichte der Ästhetik.)

Mein Weg zu Marx (Georg Lukács zum siebzigsten Geburtstag.)

1934 „Die Bauern“ (Balzac und der französische Realismus.)
(男沢・針生訳「バルザックとヘンリス・リアリズム」岩波書店)

Der Briefwechsel zwischen Schiller und Goethe (Goethe und seine Zeit.)

Hölderlins Hyperion (ibid.)

Kunst und objektive Wahrheit (Probleme des Realismus.)
„Grösse oder Verfall“ des Expressionismus (ibid.)

Karl Marx und Friedrich Theodor Vischer (Beiträge zur Geschichte der Ästhetik.)

Nietzsche als Vorläufer der faschistischen Ästhetik (ibid.)
1935 „Verlorene Illusionen“ (Balzac und französische Realismus.)

(男沢・針生訳「ハルサックとフランス・リアリズム」
岩波書店)

Balzac als Kritiker Stendhals (ibid.)

(同 右)

Schillers Theorie der modernen Literatur (Goethe und seine Zeit)

Friedrich Engels als Literaturtheoretiker und Literaturkritiker
(Marx und Engels als Literaturhistoriker)

(相原訳「芸術論」社会書房)

Heinrich Heine als nationaler Dichter (Deutsche Realisten
des 19. Jahrhunderts)

(佐藤訳「ハイン研究」青木書店)

Zur Ästhetik Schillers (Beiträge zur Geschichte der Ästhetik)

1936 „Die Leiden des jungen Werther“ (Goethe und seine Zeit)

(菊盛訳「ゲーテ研究」青木書店)

„Wilhelm Meisters Lehrjahre“ (ibid.)

(同 右)

Tolstoi und die Probleme des Realismus (Der russische
Realismus in der Weltliteratur)

(佐々木訳「トルストイとドストエフスキ」ダウ
ニム社)

Maxim Gorki, Der Befreier (ibid.)

„Die menschliche Komödie des vorrevolutionären

Russland“ (ibid.)

Die Tragödie Heinrich von Kleists (Deutsche Realisten
des 19. Jahrhunderts)

Die intellektuelle Physiognomie der künstlerischen Gestalten

(Probleme des Realismus)

Erzählen oder Beschreiben ? (ibid.)

1937 Der faschistisch verfälschte und der wirkliche Georg Büch-
ner (Deutsche Realisten des 19. Jahrhunderts)

Vorwort (Der historische Roman)

Der historische Roman.

1938 Marx und das Problem des ideologischen Verfalls (Marx
und Engels als Literaturhistoriker)

(相原訳「芸術論」社会書房)

Das Ideal des harmonischen Menschen in der bürger-

lichen Ästhetik (Probleme des Realismus)

Der Kampf zwischen Liberalismus und Demokratie im

Spiegel des historischen Romans der deutschen Antifaschisten
(ibid.)

Es geht um den Realismus (ibid.)

(伊東・小森訳「リアリズム論」廣津社)

Der junge Hegel.

1939 Die internationale Bedeutung der demokratisch-revolutionä-
ren Literaturkritik (Der russische Realismus in der Welt-
literatur)

- Gottfried Keller (Deutsche Realisten des 19. Jahrhunderts.)
 Wilhelm Raabe (ibid.)
 Schriftsteller und Kritiker (Probleme des Realismus)
 (伊東・小森訳「リアリズム論」理論社)
 Ein Briefwechsel zwischen Anna Seghers und Georg Lukács
 [1938-9] (ibid.)
 (同 右)
- 1940 Zum hundertsten Geburtstag Zolas (Balzac und der französische Realismus)
 (男沢・針生訳「バルザックとゾラ」リブリズム
 岩波書店)
 Faust-Studien (Goethe und seine Zeit)
 (菊盛訳「ゲーテ研究」青木書店)
 (笹本訳「ゲーテとその時代」中央公論社)
 Volkstribun oder Bürokrat? (Marx und Engels als Literaturhistoriker)
 (相原訳「芸術論」社会書房)
- 1943 Eichendorff (Deutsche Realisten des 19. Jahrhunderts.)
 Dostojewskij (Der russische Realismus in der Weltliteratur.)
 (佐々木訳「トルストイとドストイェフスキ」ダヴィ
 ニル社)
- 1944 Tolstoi und die westliche Literatur (Der russische Realismus in der Weltliteratur.)
 (佐々木訳「トルストイとドストイェフスキ」ダヴィ
 ニル社)
- 1945 Einführung in die ästhetischen Schriften von Marx und Engels (Beiträge zur Geschichte der Ästhetik.)
 (川口・外訳「マルクス・エンゲルス文学・芸術論」大
 月書店)
- Deutsche Literatur im Zeitalter des Imperialismus.
 (道家・小場瀬訳「ドイツ文学小史」岩波書店)
- 1946 Auf der Suche nach dem Bürger (Thomas Mann.)
 Vorwort zur ersten und zweiten Auflage (Der russische Realismus in der Weltliteratur.)
 1947 Vorwort (Goethe und seine Zeit)
 (菊盛訳「ゲーテ研究」青木書店)
- „Boris Godunow“ (Der russische Realismus in der Weltliteratur.)
 Fortschritt und Reaktion in der deutschen Literatur.
 (道家・小場瀬訳「ドイツ文学小史」岩波書店)
- Existentialismus oder Marxismus?
 (城塚・生松訳「実存主義かマルクス主義か?」岩波書
 店)
- 1948 Tschernyschewskis Roman „Was tun?“ (Der russische Realismus in der Weltliteratur.)
 Vorwort (Thomas Mann.)
 Die Tragödie der modernen Kunst (ibid.)
 Von der Verantwortung der Intellektuellen (Georg Lukács
 zum siebzigsten Geburtstag)

1949 Puschkins Platz in der Weltliteratur (Der russische Realismus in der Weltliteratur.)

Wirta : „Einsamkeit“ (ibid.)

Scholochow : „Der stille Don“ (ibid.)

Beck : „Wolkolansker Chaussee“ (ibid.)

Heidegger redivivus (Existentialismus oder Marxismus ?)

[1948 ?]

1950 Kasakewitsch : „Frühling an der Oder“ (Der russische Realismus in der Weltliteratur.)

Vorwort (Deutsche Realisten des 19. Jahrhunderts.)

Der alte Fontane (ibid.)

1951 Vorwort (Balzac und der französische Realismus.)

(男沢・針生訳「バルザックとヘンリマン・リブリスメント」
筑波書店)

Vorwort (Existentialismus oder Marxismus ?)

Vorwort zur dritten Auflage (Der russische Realismus in der Weltliteratur.)

Fadejew : „Die Neunzehn“ (ibid.)

Makarenko : „Der Weg ins Leben“ (ibid.)

Scholochow : „Neuland unterm Pflug“ (ibid.)

Hegels Ästhetik (Beiträge zur Geschichte der Ästhetik.)

Literatur und Kunst als Überbau (ibid.)

1952 Vorwort (Beiträge zur Geschichte der Ästhetik.)

Einführung in die Ästhetik Tschernyschewskijs (ibid.)

Vorwort (Die Zerstörung der Vernunft.)
Gesunde oder kranke Kunst ? (Georg Lukács zum
siebzehnten Geburtstag.)

1953 Nachwort (Die Zerstörung der Vernunft.)

1954 Vorwort (Der junge Hegel.)

Vorbemerkung zur deutschen Ausgabe (Der historische
Roman.)